

【ポスター発表】

## 要介護独居高齢者を支える主観的幸福感の構成要素に関する分析

大阪市立大学 氏名 楊曉敏 (会員番号 009281)

キーワード3つ：独居高齢者、主観的幸福感、KJ法

### 1. 研究目的

日本は少子高齢化が進展し、その中で核家族化などの世帯構造の変化に伴って、独居高齢者の数が急激に増えている。こうした高齢化社会において、独居高齢者はそれぞれの生活課題を抱え、健康的・経済的・社会的に非常に不利な状況に置かれていると指摘され、様々な面で支えられるべき存在として捉えられている。それにも関わらず、「平成26年度一人暮らし高齢者に関する意識調査」（厚生労働省）では、「今後の同居の意向」について、「今のまま一人暮らしでよい」と考えている高齢者は76.3%に及んでおり、最も多い回答となっている。また、同じ調査では、「介護の場所」について、日常生活を行う能力がわずかに低下し、何らかの支援が必要な状態であるが、「現在の自宅」を希望すると答えた高齢者の割合が66.6%である。この調査結果から、独居高齢者は、困難を抱えながらも独居を続けたいという意向を持っていることが分かる。筆者はその結果から、上述したような不利を抱え、困難と思える状況がありながら、独居生活を支える幸せや喜びの詳細を明らかにしたいと考える。

本研究は調査により、要介護独居高齢者の生活実態を把握した上で、今まで研究されてきた主観的幸福感に関連する要因を再確認しながら、質的研究を通じて、彼（女）らの一人暮らしの「主観的幸福感」の内容及びそれを形成している要素について明らかにする。

### 2. 研究の視点および方法

本研究の調査協力者は、通所介護施設で勤務する知人に紹介してもらった。介護が必要な状態において自宅で独居生活をする高齢者に対して、一回目の事前アンケート調査と二回目の半構造化インタビュー調査を行った。事前アンケート調査の結果は単純集計せず、各質問項目の個人 Introduction of my city 別結果を比較するなどして、各項目に関する対象者の全体的傾向を解釈した。また、インタビュー調査ではICレコーダーで録音した内容を、すべて逐語録に書き起こして分析データとした。文章化したデータは、川喜田二郎が考案したKJ法を参考に、繰り返し読みながらグループ化し、これらのグループを他のグループとの共通性と相違性を検討しながら分類し、コード、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出するという質的分析を行った。

### 3. 倫理的配慮

調査対象者には事前に、調査依頼状にて研究の目的、内容、具体的手順、個人情報保護、結果の公表などを説明し、同意を得た上で調査協力を得た。また事前アンケート調査の前に、再度、調査依頼状の内容を口頭で説明し、調査協力者から同意書への署名を得た。

インタビュー調査の内容は逐語録を作成する際、個人名、施設名、地域名などの個人情報全てを匿名化した。逐語録作成後、録音データはパスワードを付与したファイルにてUSBメモリに保存した。上記のデータは研究終了後10年間保管した後、アンケート調査表は破棄、USBメモリは全て消去し処分する予定である。調査協力者が不利益を被ることがないよう、結果の公表の際には、個人情報の保護には最大限の注意を払う。なお、本研究は、平成29年7月24日に、大阪府立大学人間社会システム科学研究科研究倫理委員会において倫理審査を受け、承認を得た。

#### 4. 研究結果

本研究では、大阪府内のデイサービスまたは通所リハビリテーションの利用者であり、要介護1～2の独居高齢者計5名からの調査協力を得られた。

調査の目的に沿って分析の結果に示された概念を4つの【カテゴリー】、23個の『サブカテゴリー』、68個の[コード]にまとめた。要介護高齢者の主観的幸福感の構成要素は【一人の老後に対する自己認識】、【一人の老後に立ち向かう力】、【地域社会との多様なつながり】、【幸福の自己定義】の4つのカテゴリーであることが明らかとなった。その中でも、【一人の老後に対する自己認識】では、要介護独居高齢者の一人の老後に対するポジティブな認知である『自由感・開放感』、『自宅が良い』の2つのサブカテゴリーと、ネガティブな認知である『喪失感』、『孤独感』、『退屈感』、『気掛かり』、『老いた自分が情けない』、『一人暮らしに立ちほだかるもの』の6つのサブカテゴリーが見出された。【一人の老後に立ち向かう力】は『積極的な自己暗示』、『自立心』、『生きることの諸相』、『生きがい感』、『自分を支える「心の杖」』、『生活の基盤』、『過去生活に対する肯定感』の7つのサブカテゴリー、【地域社会との多様なつながり】は『インフォーマル・サポート』、『フォーマル・サポート』、『他人との関係性』の3つのサブカテゴリー、【幸福の自己定義】は『健康であること』、『平凡な暮らし』、『地域社会の支え』、『人とのつながりを持つ』、『今の生活への満足感』の5つのサブカテゴリーから構成された。

#### 5. 考察

要介護独居高齢者は、一人の老後に対するポジティブな認知とネガティブな認知を自覚しながら、積極的に老いる自分を受け入れ、フォーマル・サポートとインフォーマル・サポートを介し、前向きな気持ちで一人の老後生活を送っており、自分の幸福に対する定義を生み出していた。また、【幸福の自己定義】が【一人の老後に対する自己認識】と【一人の老後に立ち向かう力】および【地域社会との多様なつながり】の間のバランスにも働きかけるという響き合う関係が存在すると考える。

以上より、要介護状態にある独居高齢者の主観的幸福感を向上させるためには、高齢者自身が一人暮らしの楽しみを見出し、心地よく住み慣れた地域で自立と依存が両立した生活を送ることが望ましいと考える。また、訪問介護サービスの介護職員は独居高齢者に対して、介護サービスを提供するだけでなく、人として関係性を構築し、問題解決を行うことが必要であると考えられる。